

平成二十七年九月十二日(土)

午後十二時三十分始

十四世六平太記念能楽堂

# 條風會

喜多流能楽  
Jo-fu-kai

時をかさね  
あらたに  
たち起こる風

能 松 風 友枝雄人  
 狂言 舟 ふな 野村万蔵  
 能 殺 生 石 女体 内田成信

次回予告

平成28年2月20日(土)

能 忠 度 友枝雄人

能 海 人 経懐中之舞 狩野了一

平成28年9月10日(土)

能 頼 政 内田成信

能 三 輪 岩戸之舞 金子敬一郎

チケットのお申し込みは

- ◆一般6,000円(前売り5,000円)
- ◆学生4,000円(前売り3,000円)
- ◆座席指定券—————2,000円

お申込み・お問合せ先

喜多能楽堂 Tel — 03(3491)8813

狩野 了一 Tel Fax 03(3301)9788

友枝 雄人 Tel Fax 03(5950)4543

内田 成信 Tel Fax 03(3721)3311

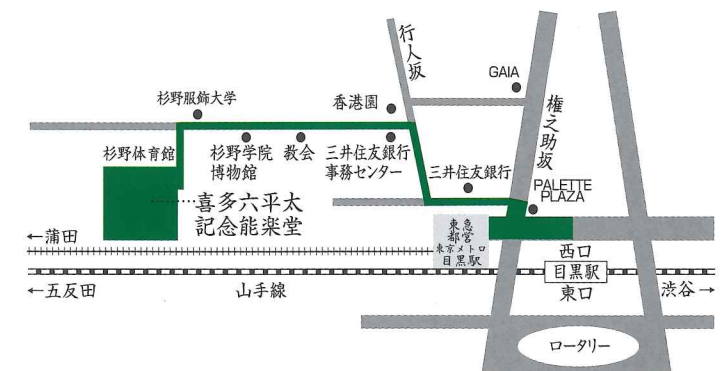
金子敬一郎 Tel Fax 048(432)6620

E-Mail ————— ticket@jo-hu.net

Web ————— http://jo-hu.net/

十四世喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-9



JR 線、東急目黒線、都営三田線、営団南北線ともに目黒駅下車、徒歩 7 分

※当能楽堂には駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮願います

※許可無き写真撮影・録画・録音等は固くお断りいたします



# 番組組

仕舞 花

笹 ルイ

金子敬一郎

地謡

塩津圭介  
大島輝久  
佐々木多門  
友枝真也

シテツレ・村雨の靈狩 野了一  
シテ・松風の靈友 枝雄人

# 能 松 風

ワキ・旅僧 宝生欣哉

アイ・須磨の浦人 野村万蔵

大鼓 亀井広忠  
小鼓 観世新九郎

笛 一噌隆之

後見 塩津哲生  
佐々木多門

地謡

佐藤寛陽 谷川大嗣作  
佐藤泰之 香川昭世  
栗谷浩之 友枝敬一郎  
谷友矩 金子一郎

# 狂言 舟ふな

シテ主 野村万蔵

アド 太郎冠者 野村拳之介

休憩 二十分

仕舞 鶴

塩津哲生

地謡

佐藤寛泰  
佐々木多門  
金子敬一郎  
金子一郎  
大島輝久

# 能 殺生石

女体

ワキ・玄翁和尚 殿田謙吉

アイ・玄翁の能力 野村虎之介

大鼓 柿原弘和 太鼓 小寺真佐人  
小鼓 鵜澤洋太郎 笛 藤田貴寛

後シテ・妖狐の靈 内田成信  
前シテ・里女

後見

内田安信  
中村邦生

地謡

狩野祐一 大出雲村康雅定  
大島輝久 栗谷能夫  
大島充雄 栗島茂  
栗谷真也

終了予定 午後四時三十分頃

## 松風 (まつかぜ)

諸国一見の旅僧は、ある秋の夕暮れ、須磨の浦に着き、由緒ありげな松を見つけます。所の者に尋ねると、松風、村雨という二人の蟹の旧跡であると教えられます。僧は、その松をねんごろに申つた後、近くの塩焼小屋で一夜をあかそうとします。やがて二人の蟹が、月明りに夜汐を汲み、蟹の身を嘆きつつ、車をひいて帰って来ます。僧は、彼女らに一夜の宿を乞います。姉妹は、見苦しい詫び住いを恥じて断りますが、重ねての申し出に、僧を請じ入れます。そして僧が、磯辺の松を申つた話をする。二人は涙にくれます。僧が不審に思つて、その仔細を尋ねると、実は、昔この浦に流されていた行平に寵愛をうけた松風・村雨の幽霊であると名のり、行平との懐しい思い出や、行平が都に帰つて間もなく世を去つたことを物語ります。そして松風は、行平の形見の烏帽子狩衣を手にしながら追憶の涙に沈みます。やがてその装束を身につけた松風は、物狂となり、狂おしく舞い、松が行平であるかのように寄り添います。そして松風は村雨と共に妄執の苦しみを述べ、回向を乞うように見えたが、それは僧の夢であり、夜が明けてみると、松風の音が残るだけでした。

この曲では恋慕の情の表現が際立ち、うねるようなその変化が、ほかにないような面白さを導き出しています。次第に感情が高ぶり、極まっていくのですが、その底にはしつとりした雰囲気が流れ、深々とした緊張感が漲ります。

## 舟ふな (ふな)

主人が太郎冠者を連れて西宮見物に行く途中、神崎の渡しにさしかかる。そこで冠者は、舟を「ふなやくい」と呼ぶので、主人は「ふね」と呼ぶようたしなめる。すると冠者は、古歌をひいて「ふなが正しいとやり返す。主人も古歌で応酬しようと思いますが、同じ歌しか思い浮かびません。そこで「ふね」と謡っている謡のことを思い出し得意そうに語り始めますが……

小賢しい太郎冠者を扱った小品で、軽妙な味わいがあります。

## 殺生石 女体 (せつしょうせき によたい)

玄翁という高僧が下野国那須野の原を通りかかります。ある巨石の上を飛ぶ鳥が落ちるのを見て、玄翁が不審に思っていると、ひとりの女が現れ、その石は殺生石といって近づく生き物を殺してしまふから近寄ってはいけないと教えます。玄翁の問いに、女は殺生石の由来を語ります。「昔、鳥羽の院の時代に、玉藻の前という女官がいた。才色兼備の玉藻の前は鳥羽の院の寵愛を受けたが、狐の化け物であることを陰陽師の安倍泰成に見破られ、正体を現して那須野の原まで逃げたが、ついに討たれてしまう。その魂が残つて、殺生石となった」。そう語り終えると女は玉藻の前の亡霊であることを知らせて消えます。玄翁は、石魂を仏道に導いてやろうと引導を渡します。すると石が割れて、野干(狐の異名)の精霊が姿を現します。野干の精霊は、「天竺、唐、日本をまたにかけて、世に乱れをもたらしてきたが、安倍泰成に調伏され、那須野の原に逃げたところを、三浦の介、上総の介の二人が指揮する狩人たちに追われ、ついに射伏せられて那須野の原の露と消えた。以来、殺生石となつて人を殺して何年も過して来た」と、これまでを語ります。そして今、有難い仏法を授けられたからには、もはや悪事はいたしませんと、固い約束を結んだ石となつて、野干の精霊は消えていきます。

本日は「女体」の小書付となり、特に後場の演出に大きな違いがあります。常は鬼畜系の面装束にてキビキビとした所作ですが、女体の小書がつくと半妖半人的な女性の姿となり、玉藻の前の美しくも怪しい佇まいが主題となります。